

【夕鶴】 ゆふづる

私は未だ『夕鶴』という銘の茶道具と出会ったことはありません。

文学作品を出典とする銘は和語の場合『源氏物語』『伊勢物語』勅撰和歌集などからの取材がほとんどで、民話からの銘は時代物には見当たりません。

しかし、銘の幅を広げようと企むとき、民話は未開の宝庫・穴場となるはずです。

花・紅葉に否定的な価値観に基づき、なお無類の美しさに富む『夕鶴』の話は茶趣に適う銘と確信しています。

私はいつの日か雪の降る夕暮れに、この物語を茶席の設えに再現して、静かに茶を点ててみたいと願っています。

じやんにきせるふとぬうの  
ばやんにきせるふとぬうの  
ちんからかん とんとんとん  
ちんからかんからとんとんとん

わらべ歌で始まる木下順二の戯曲『夕鶴』は佐渡に伝わる民話のもとといわれています。(柳田国男『全国昔話記録』第一編『佐渡昔話集』鶴女房)

しかし、『鶴女房』『鶴の恩返し』といわれる民話の類型は佐渡に限らず日本各地に伝わっているようです。

罾にかかった鶴が、あるいは矢に射られ傷ついた鶴が翁に助けられ、恩を返そうと人間の姿に身をやつし、翁夫婦を訪ねて娘となり機を織って夫婦を長者にするという話です。鶴は幸せを運ぶ鳥なのですね。しかし翁は見てはならない娘の本当の姿を見てしまい、娘は鶴に戻り去っていくという結末が各地民話の定形のようなようです。

このほか、翁ではなく若者、養女ではなく婚姻というパターンもあり、木下順二の戯曲はこれに属します。

木下順二(1914年－2006年)は劇団「ぶどうの会」を主宰。つう役は山本安英の専任、というより安英のために順二は「夕鶴」を書いたといった方が真実のようです。1949年の初演以来、1986年までに1037回もの公演をこなしたそうです。

「夕鶴」は民話の分類概念である異類婚姻譚に属し、『ギリシャ神話』のオルフェウス伝説、『古事記』のイザナギ命の黄泉の国訪問などに見られる「見るなのタブー」と称する破局の形式をなしています。

無欲な心のもたらす幸せと欲深な愚かさという民話らしい主題を見事な対比により表現しています。

都⇔田舎、金儲け⇔貧乏、欲深⇔幸せの対比を人⇔鶴に置いて表しているのです。そして景物の雪が物語をさらに美しく仕立てているのです。

金銭欲に取り憑かれ、無理に鶴の千羽織を織らせようとする与ひょうの変容をつうは嘆き、

与ひょう、あたしの大事な与ひょう、あんたはどうしたの？

あんたはだんだんに変って行く。

何だかわからないけど、あたしとは別な世界の人になって行ってしまう。

つうの悲痛な叫びは、心に突き刺さるものがあります。

人類はこの地球で生き残れるのか。人類と地球を救う鍵はつうの叫びの中に隠されているように思えてなりません。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~